

# *Bhavasamkrānti* の成立年代について

津 田 明 雅

## はじめに

*Bhavasamkrānti* にはナーガールジュナに帰せられる論書と、それとは別に経典が存在するが、本稿で扱うのは前者(*BhS* と略)である。『生存の転移』という興味深いタイトルとは裏腹に、本書の内容は、ナーガールジュナの他の著作と同様、すべては名称や分別によって作り出されたものにすぎず空である、という論を展開したものである。同名の経典である *Bhavasamkrāntisūtra* (*BhSS*)に関してはすぐれた研究が蓄積されつつあるが、本書に関しては研究が少なく、未解明な部分を多く残している。

本書にはチベット訳 4 本と漢訳 1 本のほか、偈頌の重複する関連文献があり、また *BhSS* の偈頌部分が本書の後半部分と一致するなど、そのテキストはさまざまな形で伝えられる。これら諸テキストを比較すると、テキストによっては偈頌ごとの句数が一定でなく、偈頌の区切りがあいまいである。そこで筆者はまず、偈頌の区切りの確定を前稿で試みた<sup>1</sup>。

本稿ではそれに引き続いて異読の検討をおこない、さらに成立年代や著者に関する考察をおこなう。稿末には偈頌の句切りを施した諸校訂テキストを提示する。

## 1. 先行研究

本書に関してはすでに N. Aiyaswami Sastri 氏によるチベット訳の校訂本(P と N で校合)が出版されている<sup>2</sup>。これは以下に触れる *BhS I*、*BhS II*、*BhS III* に相当する。ここには *BhS* の注釈書の校訂チベット訳や、*BhSS* の校訂チベット訳なども収められており、脚注も充実している。

---

<sup>1</sup> 津田明雅 (2013). 本稿の一部は日本印度学仏教学会第 64 回学術大会(2013 年 8 月 31 日)における発表に基づくもので、前稿と重複する箇所がある点をご容赦いただきたい。

<sup>2</sup> Sastri, N. A. (1938).

Lindtner 氏は本書に関して触れ<sup>3</sup>、「真作かもしれないが疑いのある文献」(the dubious texts [which are] perhaps authentic)の一つとして挙げる。そして *Bhavasamcara* と *Nirvikalpaprakaraṇa* にパラレルがあるという重要な指摘をする。*Madhyamakaratnapradīpa* に第 6 偈が引用されること、*Ādikarmapradīpa* に 1 偈引用されることも指摘する。

漢訳には羽溪了諦氏による解題と書き下し文がある<sup>4</sup>。同氏は本書の内容を吟味して真作であるとし、漢訳年代は 985 - 990 年の間であることを明らかにした。

一方で *BhSS* に関する研究は、上記 Sastri 氏によるチベット訳校訂本の出版に続き、袴谷憲昭氏が本経の成立過程を詳細に検討した<sup>5</sup>。また松田和信氏は *Vyākhyāyukti* に引用される 3 偈を中心に考察し、*BhSS* に関する新たな引用文献も指摘する<sup>6</sup>。近年では *BhSS* のサンスクリットが Vinītā 氏の手により日の目を見ることになった<sup>7</sup>。その他、Tola と Dragonetti 両氏による英訳および内容の考察<sup>8</sup>や、片野道雄氏によるツォンカパの視点から見た *BhSS* の考察など<sup>9</sup>がある。

*BhSS* は散文とそれに続く 7 つの偈頌から構成されるが、この偈頌部分が本書の第 12 - 18 偈と一致する。*BhSS* の偈頌部分と *BhS* のいずれが先行するかは不明だが、*BhSS* の散文部分と偈頌部分は内容的に関連が薄く、さらに偈頌部分はタイトルとの関連も薄いため、*BhSS* の偈頌部分は *BhS* からの抜粋ではないかと推測される<sup>10</sup>。それゆえ本稿では仮に、*BhS* が *BhSS* よりも先に成立していたという前提に立って

<sup>3</sup> Lindtner, Chr. (1982) p.13.n.19.

<sup>4</sup> 羽溪了諦 (1931).

<sup>5</sup> 袴谷憲昭 (1977).

<sup>6</sup> 松田和信 (1985). さらに付け加えるならば、*Prajñāpradīpa* に *BhSS* 7 が 2 回 (ad *Mūlamadhyamakakārikā*(*MK*) III-2: P 5253, tsha92b1-2; D 3853, tsha76b6-7/ ad *MK* III-8: P 100a7-8, D 83a4-5) と *BhSS* 6 (ad *MK* XX-24: P 255a1-2, D 203b7) が、*Avalokitavrata* による *Prajñāpradīpaṭīkā* に、本文の引用とは別に、*BhSS* 5 (ad *MK* III-2: P 5259, ža9b8(10a 以下のテキストは他版本と異なる); D 3859, ža8a5; N 3250, ža9b6; S 3258, ža11a6-b1) と *BhSS* 7 (ad *MK* III-2: P ?, D ža8a6-7, N ža9b7, S ža11b1-2) と *BhSS* 散文部分 (ad *MK* XX-5: P za156a2-4, D za127b7; Vinītā, Bh. (2010) p.430.3-4 と部分的に一致) が、Triratnadāsa(ca.480-540, Dignāga の弟子)による *Āryaprajñāpāramitāsamgrahakārikā-vivarana* に *BhSS* 2, 3, 1 (P 5208, pha359b6-360a1; D 3810, pha314a3-5) が、Jitāri による *Sugatamatavibhaṅgabhāṣya* に *BhSS* 2 (Shirasaki, K. (1985) p.135.5-8) が引用される。いずれも引用の仕方などから、*BhS*(論)ではなく *BhSS*(経)からの引用と考えられる。

<sup>7</sup> Vinītā, Bh. (2010) pp.409-451.

<sup>8</sup> Tola, F. and Dragonetti, C. (1986).

<sup>9</sup> 片野道雄 (2000), Williams, P. M. (1980) pp.26.12-14, 27.22-31; 池田道浩(1995), 池田道浩 (1995b).

<sup>10</sup> Tola, F. and Dragonetti, C. (1986) pp.4.32-5.16.

論じたい。

## 2. テキストについて

本書のテキスト、および関連文献、引用文献などには以下のものがある。

<チベット訳>

*Bhavasamkrānti* (BhS I), *Srid pa 'pho ba*, P 5240.

*Bhavasamkrānti* (BhS II), *Srid pa las 'das pa*, P 5472.

*Bhavasamkrāntiparikathā* (BhS III), *Srid pa las 'das pa'i gtam*, P 5662.

*Bhavasamcara* (Bhsam), *dÑos po spyod pa*, P 3124.

<漢訳>

『大乘破有論』施護訳 (大正 1574)

<関連文献>

*Nirvikalpaparakaraṇa* (NP) by Āryadeva, P 3126.

*Bhavasamkrāntisūtra* (BhSS), Skt.

*Bhavasamkrāntiṭīkā* by Maitreyaṇātha, P 5241.

<引用文献など>

*Madhyamakaratnapradīpa* (MRP) by Bhavya, P 5254: 第 6 偈を引用<sup>11</sup>.

*Ādikarmapradīpa*, Skt.: 第 10 偈を引用<sup>12</sup>.

*Kāyaparīkṣābhāvanākrama* by Kṛṣṇa, P 5316, 5455: 第 6 偈を引用<sup>13</sup>.

*Samādhisaṃbhāraparivarta* by Bodhibhadra, P 5319: 第 6 偈を引用<sup>14</sup>.

*Ratnakaraṇḍodghāṭa-nāma-madhyamakopadeśa* by Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa),

---

<sup>11</sup> *slop dpon gyi źal śna nas / dBu ma srid pa 'pho('phro P) ba las ji srid du /*  
*'jig rten rnam par rtog las byuñ // rnam par rtog pa sems las byuñ //*  
*sems kyañ lus las byuñ bas na // de phyir lus la rnam par brtag / (BhS 6)*  
*ces gsuñ pa yin no // (P 5254, tsha352a7-8; D 3854, tsha279b3-4)*

<sup>12</sup> de La Vallée Poussin, L. (1898) p.196.16-17; 高橋尚夫 (1993) p.143.16-17.

<sup>13</sup> *'di la slob dpon Klu sgrub kyi źal śna nas /*  
*'jig rten rnam par rtog las(pas P5316) byuñ // rnam par rtog pa(pas P5316) sems las byuñ //*  
*sems kyañ lus las(la P5455) byuñ bas na // de'i(de P5455) phyir lus la dpyad par bya // (BhS 6)*  
*źes gsuñ te / (P 5316, a77b6-7; P 5455, gi194a7-8; D 3920, ki71a3-4; D 4541 未見.)*

<sup>14</sup> *'phags pa Nā gā rdzu na'i źal śna(om. P) nas /*  
*'jig rten rnam par rtog las byuñ // rnam par rtog pa sems las byuñ //*  
*sems kyañ lus las byuñ bas na // de phyir lus la dpyad par bya // (BhS 6)*  
*źes bśad la / (P 5319, a99b8-100a1; D 3924, ki90b7-91a1)*

P 5325: 引用ではないが、本書を Nāgārjuna の著作の 1 つに挙げる<sup>15</sup>。

### 3. 異読の検討

偈頌の句切りを整理した諸本を比較し、本書本来のテキストの確定を試みたい。まず確定できるのは、*BhSS* のサンスクリットから得られる第 12 - 18 偈である。そして *Ādikarmapradīpa* に引用される第 10 偈もサンスクリットが残り、諸テキストともよく一致するので確定できる。

また *MRP* に引用される第 6 偈は、*BhS I* と漢訳を除いたものとよく一致しており、意味的にみても *BhS II*、*BhS III*、*Bhsm̄*、*NP* の読みを採用すべきであろう。

第 11 偈は、*ab* 句は *BhS II*、*BhS III*、*Bhsm̄* に沿ったものが本来のものと考えてよさそうであるが、*cd* 句に関してはテキスト間の違いが多く、定め難い。

残る第 1 - 9 偈は 6 つのテキストが比較できる。

第 9 偈は *acd* 句に関してはどのテキストもほぼ一致しているが、*b* 句の読みが 3 通りあり、いずれとも定め難い。

第 8 偈はいずれのテキストもほぼ一致するが、唯一 *c* 句の *lam* が *BhS II* と *BhS III* では *las* である。ここは前者を本来の読みとみて、全体としては、特に *Bhsm̄* と漢訳の読みが採用できよう。

第 7 偈は、*ab* 句ではテキスト間で大きな違いはないが、*cd* 句で違いが大きく、いずれとも定め難い。意味内容としては *BhS II* と *BhS III* が比較的通りがよい。

第 5 偈は、*ab* 句はどのテキストもほぼ一致している。*c* 句では *BhS II* と *BhS III* がやや異なるが、それ以外のテキストは一致する。*d* 句の幻の街の喩えがテキストによって表現が異なる。「幻の街」、「月のライオンの街」、「美しい月の街」、「ガンダルヴァの都」、「月の中の影像」と少しずつ語句が異なる。この偈頌全体として読みが妥当と思われるのは *NP* である。

第 4 偈は *BhS II* と *BhS III* では *ab* 句に相当するものしかない。この前半部分は漢訳を除くすべてのテキストで類似するが、微妙に意味が異なる。後半部分はテキスト間の違いが大きい。全体的に意味がまとまっているのは *Bhsm̄* と *NP* であろうか。

第 3 偈は *ab* 句、*cd* 句のそれぞれで、順序が逆になっているテキストがある。読

<sup>15</sup> *Srid pa 'pho ba dan* / (P 5325, a128a6; D 3930, ki113b1; 宮崎泉 (2007) pp.60.3-4, 112.7)

み自体は abc 句(*Bhṣaṃ* と *NP* では abd 句)ではほぼ一致するが、d 句(*Bhṣaṃ* と *NP* では c 句)には 3 通りある。妥当なのは *BhS I* と漢訳のものであろうか。

第 2 偈は a 句でどのテキストもほぼ一致する以外は、読みがさまざまに異なる。b 句は *BhS II* と *BhS III* の読みが同じで他と異なり、2 通りの読みが得られる。c 句は *BhS II* と *BhS III* と *NP* の読みがほぼ一致するも他と異なり、2 通りの読みが得られる。d 句は *BhS II* と *BhS III* が同一、*Bhṣaṃ* と *NP* が類似するが他は読みが異なり、4 通りの読みが得られる。いずれを採るべきか、判断するのは難しい。

第 1 偈は前半部でテキスト間に違いが多い。a 句は *BhS II* と *BhS III* の読みが同一である以外はすべて異なっており、b 句は *BhS III* と *NP* の読みが類似しており、*Bhṣaṃ* と漢訳の読みが近いが、他は異なる。cd 句は *NP* が c 句で異なる以外はほぼ一致している。全体としての読みは、*BhS II* を除くすべてに採用の余地を残しているといえよう。

ここで検討した本書本来の読みの可能性のあるものは、前稿の表中に白抜きで示した。

#### 4. 成立年代について

チベット訳の奥書き(*BhS I - III*, *Bhṣaṃ*)や漢訳にナーガールジュナ作とされる以外に本書の成立年代を裏付けるものとしては、アーリヤデーヴァによる *NP* における引用が挙げられる。しかしそれ以降では、*BhSS* からの引用は多くあるが、本書からの引用は 9 世紀初頭から 10 世紀初頭<sup>16</sup>の *MRP* と 11 世紀頃の残る 4 文献に確認できるにすぎない<sup>17</sup>。

翻訳文献や注釈書の年代をみると、*BhS I* は奥書きには翻訳者名が記されないが、プトウンのテンギェル目録やデルゲ版の目録<sup>18</sup>には *Zla ba gžon nu* 訳とあり、これに従えば 8 世紀頃の翻訳となる<sup>19</sup>。*BhS II, III*, *Bhṣaṃ* および *NP* のチベット訳者の

<sup>16</sup> 江島氏による推定年代: 江島恵教 (1990) p.104.13-14.

<sup>17</sup> 4 書のうち 3 書は *Atiśa* の時代のもので、残る *Ādikarmaṣradīpa* の作者 *Anupamavajra* は「恐らく 10~11 世紀に存在した学匠の一人」(高橋尚夫 (1992) p.555.11)とされる。

<sup>18</sup> Lokesh Chandra (1971) pp.510-511, 84b7-85a1; 東北目録 no.3840, p.579.15.

<sup>19</sup> ここでいう *Zla ba gžon nu* とは *Mahāyānaviṣṣikā* の翻訳者である *Candrakumāra* のことである: 津田明雅 (2013) pp.136.8, 137-138.n.16.マイトレーヤに帰せられる注釈書の翻訳者も *Zla ba gžon nu* であり、同書は *Śāntideva* (ca.685-763)の著作の引用があることからその成立は 8 世紀以降と考えられ、8 世紀頃の *Zla ba gžon nu* はその著者として疑われる人物である。同注釈に部分的に引用される本頌は *BhS I* の訳文とよく一致し、この注釈は *BhS I* に基づいて著されたと言える。

年代は 11 世紀半ばから 12 世紀初めである<sup>20</sup>。漢訳は 10 世紀末。マイトレーヤに帰せられる注釈書は翻訳者 *Zla ba g'zön nu* の年代を考慮すると 8 世紀頃のものとなる。

またチベットの仏典目録の記述をみると、デンカルマ (824 年成立) やパンタンマには *BhSS* の記載しかない<sup>21</sup>が、『プトゥン仏教史』目録部 (1322 年) には *BhSS* のほかに *BhS I* とその注釈、*BhS III*、*BhSam*、*NP* が記載されている<sup>22</sup>。さらにプトゥンのテンギユル目録 (1362 年) では、*BhS I* と注釈、*BhS III*、*BhSam*、*NP* に加えて中観部に *BhS II* の記載がある<sup>23</sup>。

*NP* がアーリヤデーヴァの真作であるならば本書もナーガールジュナによる真作である可能性が高いであろうし、一方で、チベットや中国での受容や引用典籍の時代を考慮すると、本書はかなり時代が下ってから作成された可能性もある。仮に、本書をナーガールジュナに、*NP* をアーリヤデーヴァに帰するということが、いずれも後世の仮託によるものだと考えれば、最も古い年代の根拠は *BhS I* とその注釈

*Zla ba g'zön nu* は *BhS I* を翻訳した後、自らそれに対して注釈を著した可能性が考えられるのである。ちなみに注釈の奥書きは、*paṇḍita Byams pa mgon pos mdzad pa'o // paṇḍita Zla ba g'zön nu la / Gru ston chuñ gis žus nas rañ 'gyur du mdzad pa rdzogs so // //* (Sastri, N. A. (1938) p.103.11-14) とあり、マイトレーヤが著し、*Zla ba g'zön nu* が *Gru ston chuñ* に請われて自ら翻訳したと読める。*Zla ba g'zön nu* は、マイトレーヤに仮託した自著を、「自ら」翻訳した、ということだろうか。

<sup>20</sup> *BhS II, III: Śrīraṭha* と *Grags 'byor śes rab* (翻訳年代は 11 世紀後半から 12 世紀初め: Naudou, J. (1968) pp.174.table, 189.14-19), *BhSam: Vajrapāṇi* と *rMa ban chos 'bar* (翻訳年代は 11 世紀後半。Vajrapāṇi は *rMa ban chos 'bar* の師で、両者の生まれはそれぞれ 1017 年と 1044 年: Roerich, G. N. (1953) pp.404.32-34, 405.9-11, 857.20-35), *NP: Mahākaruṇa* と *rMa ban chos 'bar* (翻訳年代は、*rMa ban chos 'bar* の年代(1044 - 1089)を考慮すると、11 世紀後半。Mahākaruṇa の活動年代は 11 世紀後半から 12 世紀初め: Naudou, J. (1968) p.174.table).

<sup>21</sup> Lalou, M. (1953) p.324.23, no.224: *Srid pa 'pho ba / 70 śloka //*; 川越英真 (2005) p.14.26, no.204: *Srid pa 'pho ba / 70 śloka /*.

<sup>22</sup> 西岡祖秀 (1980) p.76.16-17, no.367: *Srid pa 'pho ba'i mdo 70 śloka Ye śes sde'i 'gyur / (BhSS)*; 西岡祖秀 (1981) p.52.16-17, no.574-575: *Srid pa 'pho ba / de'i 'grel pa Paṇḍi ta Byams pa mgon pos mdzad pa Zla ba g'zön nu'i rañ 'gyur / (BhS I と注釈)*; p.60.10-11, no.800: *Srid pa las 'das pa'i gtam Grags 'byor śes rab kyi 'gyur / (BhS III)*; 西岡祖秀 (1983) p.110.10-11, 13-14, nos.2766, 2769: *slop dpon Klu sgrub kyis mdzad pa'i dÑos po sbyañ(śnañ) ba / (BhSam)*, *slop dpon Ārya de bas mdzad pa'i rNam par mi rtog pa'i rab tu byed pa dañ bži (= nos.2766-2769) rMa chos 'bar gyi 'gyur / (NP)*.

<sup>23</sup> Lokesh Chandra (1971) pp.510-511, 84b7-85a1: *dBu ma srid pa'i 'pho ba 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa / Zla ba g'zön nu'i 'gyur / de'i 'grel pa pa ṅḍi ta Byams pa mgon pos mdzad pa / Zla ba g'zön nu'i rañ 'gyur / (BhS I と注釈)*; p.528, 93b4-5: *Srid pa 'das pa 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa / kha che'i pa ṅḍi ta Śrī ra tha dañ / lo tsā ba Grags 'byor śes rab kyi 'gyur / (BhS II)*; p.547, 103a7: *Srid pa las 'das pa'i gtam 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa / pa ṅḍi ta Śrī ra tha dañ / lo tsā ba Grags 'byor śes rab kyi 'gyur / (BhS III)*; pp.435-436, 47a6-47b1: *dÑos po sbyor ba žes bya ba 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa / pa ṅḍi ta Ba dzra pā ṅḍi dañ / rMa ban chos 'bar gyi 'gyur / (BhSam) ... rNam par mi rtog pa'i rab tu byed pa slop dpon Ā rya de bas mdzad pa / pa ṅḍi ta Ma hā kā ru ṅa dañ / rMa ban chos 'bar gyi 'gyur / (NP)*.

書の 8 世紀頃という翻訳年代となる。ただし、これは当該の *Zla ba g'zön nu* の年代が 8 世紀頃であるという想定に基づくものであり、もし該当者が同名異人であれば、年代は後代にずれることになる。

## 5. 著者について

本書はナーガールジュナ作とされるけれど、引用文献も少なく、その真作性を証明する根拠に乏しい。そこで本書の内容に注目し、ナーガールジュナに帰せられる他の著作を中心に、類似した記述を検討してみたい。

第 7 偈では五蘊それぞれに実体(\**svabhāva*)がないことが説かれるが、同様の内容が *Ratnāvalī (RĀ) IV-60 - 61* に説かれる。そこでは実体がないということが「本質が無意味な(*ātma-vaiyarthya*)」とされる。両者はテキスト自体は平行ではないが、内容の点で共通しているといえる。

gzugs ston tshor ba rañ b'zin med || 'du śes med ciñ 'du byed med ||

sems byuñ med ciñ dños po med || de phyir mi rtog rañ b'zin no || *Bhsam 7*

色形(\**rūpa*)は空であり、感受作用(\**vedanā*)は実体(\**svabhāva*)がなく、呼称(\**saṃjñā*)は存在せず、生成作用(\**saṃskāra*)は存在しない。心が生じることはなく、存在もない。それゆえ [すべてのものは] 分別を離れた本性(\**svabhāva*) [をもつ]。

evam dvidhāpi bhūtānām vyarthatvāt saṃgatir vṛthā |

vyarthatvāt saṃgateś cāivaṃ rūpaṃ vyartham ato 'rthataḥ || *RĀ IV-60*

vijñāna-vedanā-saṃjñā-saṃskārānām ca sarvaśaḥ |

pratyekam ātma-vaiyarthyaḥ vaiyarthyaṃ paramārthataḥ || *RĀ IV-61*<sup>24</sup>

このように両者いずれの場合にも諸要素は無意味なので、[それらの] 結合は無意味である。そしてこのように結合が無意味なので、真実としては色形は無意味である。

そして識、受、想、行のすべては、それぞれ本質が無意味なので、最高の意味(真実)としては無意味である。

第 10 - 11 偈では六波羅蜜によってさとりが獲られることを説くが、*Suḥrīlekha* 第 8 偈では六波羅蜜により仏になることを勧める記述があり、『菩提資糧論』第 6

<sup>24</sup> Hahn, M. (1982) pp.114.17-20, 116.1-4.

偈では六波羅蜜への言及がある。六波羅蜜が大乗の論書に説かれることは珍しくなく、テキストもパラレルではないため、残念ながら著者の特定には資さない。

dāna-śīla-kṣamā-vīrya-dhyānādīn sevayan sadā |  
acireṇāiva kālena prāpyate bodhir uttamā || *BhS* 10<sup>25</sup>  
thabs dañ śes rab la gnas te || sems can rnam la brtse bar bya ||  
myur ba kho nar thams cad mkhyen || thob par 'gyur bar the tshom med ||

*BhS* II 11

施しや規則や忍耐や精進や瞑想などに常に従う者 [がいれば、彼には] 実に速やかに最高のさとりが獲られるだろう。

手だて(\*upāya)と智慧(\*prajñā)に立って、命あるものたちを慈しまねばならない。実にすばやくあらゆるものを知ること(\*sarvajña)を獲て、疑いがない。

sbyin dañ tshul khriṃs bzod brtson bsaṃ gtan dañ ||  
de bzin śes rab gzal med pha rol phyin ||  
'di dag rgyas mdzod srid pa'i rgya mtsho yi ||  
pha rol phyin pa rgyal ba'i dbaṅ po mdzod || *Suḥr̥llekha* 8<sup>26</sup>

施し(\*dāna)、戒め(\*śīla)、忍耐(\*kṣānti)、努力(\*vīrya)、精神集中(\*dhyāna)、そしてまた智慧(\*prajñā)を、量り知れない [ほどに] 完成(\*pāramitā)し、これらを広めなさい。[輪廻的] 生存の海の彼岸に達して、勝利者 [たち] の主(仏)として行動しなさい。

施戒忍進定 及此五之餘 皆由智度故 波羅蜜所撰：『菩提資糧論』6<sup>27</sup>

第 12 偈には言語表現に関する記述がみられるが、すでに指摘されるように<sup>28</sup>、これと非常に類似した表現が *Acintyastava (As)* 第 35 偈にみられる。しかもそこでの記述はブッダのことばとして引かれるため、経典である *BhSS* からの引用の可能性が高いといえる。そうだとすると、成立順としては *BhS*、*BhSS*、*As* という可能性が考えられ、しかも *BhS* と *As* の著者は異なることになる。ちなみに、*Laṅkāvatārasūtra (LAS)* III-78 にも *BhS* あるいは *BhSS* を念頭に置いたような記述がみられる<sup>29</sup>。

<sup>25</sup> 脚注 12 を参照。

<sup>26</sup> Pema Tenzin (2002) p.159.7-10.

<sup>27</sup> 大正 1660, p.519.b21-22.

<sup>28</sup> Lindtner, Chr. (1982) p.153.n.35; Lindtner, Chr. (1992) p.265.

<sup>29</sup> Sastri, N. A. (1938) p.5.n.3.



nāma-mātram idaṃ sarvaṃ saṃjñā-mātre pratiṣṭhitam |

abhidhānāt pṛthag-bhūtam abhidheyaṃ na vidyate || *BhSS 1 (BhS 12)*<sup>30</sup>

この[世間の]すべては名称にすぎない。[それは]呼称にすぎないものに立っている。  
言語表現とは異なるものとして、言語表現の対象があるのではない。

nāma-mātraṃ jagat sarvaṃ ity uccair bhāṣitaṃ tvayā |

abhidhānāt pṛthag-bhūtam abhidheyaṃ na vidyate || *As 35*<sup>31</sup>

あらゆる世界 [の万象] は名称にすぎない、とあなたは高らかにおっしゃった。言語  
表現とは異なるものとして言語表現の対象は存在しない [、と]。

sūtre sūtre vikalpōktaṃ saṃjñā-nāmāntareṇa ca |

abhidhāna-vinirmuktaṃ abhidheyaṃ na lakṣyate || *LAS III-78*<sup>32</sup>

あれこれの経典に分別 [が?] 説かれる。そして呼称や名称と異なるものとして、[つ  
まり] 言語表現を離れた、言語表現の対象は、認知されない。

第 13 偈には法性(dharmatā)に関する説明があるが、特に cd 句に類似した記述が  
*Mahāyānaviṃśikā (MViṃ)* 第 17 偈にある。ちなみに、*LAS III-82, X-500* にも類似の  
記述がある<sup>33</sup>。これらのテキストも完全にはパラレルではないが、いずれかがいず  
れかを念頭に置いていた可能性が考えられよう。

yena yena hi nāmnā vai yo yo dharmo 'bhilapyate |

nāsau saṃvidyate tatra dharmāṇāṃ sā hi dharmatā || *BhSS 2 (BhS 13)*<sup>34</sup>

実にこれこれの名称によってあれそれのもの(法)が言語表現されるころの、そこ(名  
称)にそれ(もの)は存在しない。実にそれが諸々のもの(法)のもの(の状態(法性))である。

māyāṃ vidhāya māyāvī<sup>35</sup> upasaṃharate yadā |

tadā na vidyate kiṃcid dharmāṇāṃ sā hi dharmatā || *MViṃ 17*<sup>36</sup>

幻術師が幻を作り出したのち [それを] 取り去ると、何も存在しない。実にそれが、  
[世界を構成する] 諸々のものの、ものの状態である。

<sup>30</sup> Vinītā, Bh. (2010) p.438.3-6.

<sup>31</sup> 津田明雅 (2006) p.107.5-6, Lindtner, Chr. (1982) p.152.1-2.

<sup>32</sup> Nanjio, B. (1923) p.187.1-2.

<sup>33</sup> 袴谷憲昭 (1977) p.25.1-3.

<sup>34</sup> Vinītā, Bh. (2010) p.440.1-3.

<sup>35</sup> māyāvī ego / māyāvī Tucci

<sup>36</sup> Tucci, G. (1956) p.203.13-15.

(māyāiva dṛśyate māyā-nirmitaṃ saṃskṛtaṃ tadā |

nāiva kiñcit tadā bhāvo dharmāṇaṃ sāiva dharmatā || Zhang's 18<sup>37</sup>)

(まさに幻が見られる [とき]、幻術で作り出された、人為的なものは全く何も [存在し] ない。そのとき、まさにそのもの(bhāva)が、諸々のものの、ものの状態である。)

na hi yo yena bhavena kalpyamāno na dṛśyate |

na taṃ nāsyā eva gantavyaṃ dharmāṇāṃ eva dharmatā || LAS III-82<sup>38</sup>

na hi yo yena bhavena kalpyamāno na lakṣyate |

na taṃ nāsty avagantavyaṃ dharmāṇāṃ eṣa dharmatā || LAS X-500<sup>39</sup>

(na hi yo yena bhavena kalpyamāno na dṛśyate |

na so nāsty avagantavyo dharmāṇāṃ eṣa dharmatā || ego)

(実にある存在として考えられているもので、見られないことのない、[それは] 存在しないと理解されるべきではない。これが諸々のものの、ものの状態である。)

第 15 偈には分別に関する記述がみられるが、すでに指摘されるように<sup>40</sup>、部分的に一致する記述が *As* 36 にある。しかもこれはブツダのことばとして引かれるため、*BhSS* 4 を引用した可能性が高いといえよう。また、*LAS* X-10 にもよく類似した記述があり<sup>41</sup>、*LAS* と *BhSS* は影響関係にあった可能性が考えられる。

asad-bhūtā hy amī dharmāḥ kalpanātaḥ samutthitāḥ |

sāpy atra kalpanā nāsti yayā śūnyaṃ vikalpyate || *BhSS* 4 (*BhS* 15)<sup>42</sup>

実に、あれらの諸々のもの(法)は非存在の状態にある。[それらは] 分別から生じたものである。それによって空が考えられる、その分別さえここには存在しない。

kalpanā-mātram ity asmāt sarva-dharmāḥ prakāśitāḥ |

kalpanāpy asatī proktā yayā śūnyaṃ vikalpyate || *As* 36<sup>43</sup>

このことから、あらゆるもの(法)は分別にすぎないと説かれた。それによって空が考えられるところの分別でさえ、存在しないと述べられた。

<sup>37</sup> Zhang, B. (2001) p.24.2-3. テキスト中の語末の m を筆者が ṃ に訂正した。

<sup>38</sup> Nanjio, B. (1923) p.190.12-13.

<sup>39</sup> Nanjio, B. (1923) p.327.14-15.

<sup>40</sup> Sastri, N. A. (1938) p.6.n.1; Lindtner, Chr. (1982) p.153.n.35; Lindtner, Chr. (1992) p.265.

<sup>41</sup> Sastri, N. A. (1938) p.6.n.1.

<sup>42</sup> Vinītā, Bh. (2010) p.442.1-3.

<sup>43</sup> 津田明雅 (2006) p.107.11-12, Lindtner, Chr. (1982) p.152.6-7.

asārakā ime dharmā manyanāyāḥ samutthitāḥ |

sāpy atra manyanā sūnyā yayā sūnyēti manyate || LAS X-10<sup>44</sup>

これらのもの(法)は中核のないものであり、思慮から生み出される。この場合、それによって [人が] 「空だ」と考えるところのその思慮さえ、空である。

以上、6偈について類似の表現を見てきたが、いずれにおいても著者の特定には至らなかった。しかし、第12偈と第15偈の *As* や *LAS* との類似は重要である。これらからは、*As* や *LAS* が *BhSS* を参照していた可能性や、*BhS*、*BhSS*、*As* という成立順が想定される。そしてそうであれば、*BhS* と *As* の著者は異なることになる。これは、*BhS* が真作であるかナーガールジュナに仮託されたものかである限り、*As* の真作性を否定するものである。

## 6. まとめ

前稿で偈頌の区切りに関してはひとまず結論を出せたが、異読を検討した結果、テキストの読みに関しては確定できない個所がいくつか残ることとなった。

作者に関してはナーガールジュナの偽作を証明するものは今のところ見つからない。むしろ、アーリヤデーヴァの著作に共通する偈頌がみられることや、ナーガールジュナに帰せられる *RĀ* や *MViṃ* に類似した記述がみられることから、真作の可能性の方が高いといえるのかもしれない。あるいはナーガールジュナから初期の瑜伽行派の時期にかけて作成された著作群のうちの1つといえるのかもしれない。もしそうであれば、*BhSS* の偈頌部分は本書から借用されて散文部分と組み合わせられ、袴谷氏の予想する350年頃に現行の *BhSS* が成立したとみるのが可能であろう。ただし、この問題は *BhSS* を参照したと考えられる *As* や *LAS*、その他の同経引用典籍の年代の特定と合わせて、今後も検討していかねばならない。

## 参考文献

de La Vallée Poussin, L. (1898) *Bouddhism, Études et Matériaux, Ādikarmapradīpa, Bodhicaryāvatāraṭikā*, London.

---

<sup>44</sup> Nanjio, B. (1923) p.265.9-10.

- 江島恵教 (1990) 「Bhāvaviveka / Bhavya / Bhāviveka」, 『印度学仏教学研究』, 38-2, pp.98-106.
- Hahn, M. (1982) *Nāgārjuna's Ratnāvalī*, 1, Bonn.
- 袴谷憲昭 (1977) 「Bhavasamkrāntisūtra –解説および和訳–」, 『駒澤大学仏教学部論集』, 8, pp.13-40.
- 羽溪了諦 (1931) 「大乘破有論解題・大乘破有論」, 『国訳一切経』, 中観部 3, 大東出版社, pp.27-30.
- 池田道浩 (1995) 「Bhavasamkrāntisūtra を引用する Bhāviveka の意図」, 『曹洞宗研究員研究紀要』, 26, pp.1-18.
- 池田道浩 (1995b) 「Bhavasamkrāntisūtra を引用する Bhāviveka と Dharmapāla」, 『印度学仏教学研究』, 44-1, pp.118-120.
- 片野道雄 (2000) 「『転有経』についての一考察」, 『大谷学報』, 80-1, pp.1-15.
- 川越英真 (2005) 『dKar chag 'Phang thang ma』, 東北インド・チベット研究会, 仙台.
- Lalou, M. (1953) "Les textes bouddhiques au temps du Roi Khri-sroñ-lde-bcan," *Journal Asiatique*, 241, pp.313-353.
- Lindtner, Chr. (1982) *Nagarjuniana*, Copenhagen.
- Lindtner, Chr. (1992) "The Laṅkāvatārasūtra in early Indian Madhyamaka literature," *Études Asiatiques*, 46-1, pp.244-279.
- Lokesh Chandra (1971) *The Collected Works of Bu-ston*, 28, New Delhi.
- 松田和信 (1985) 「Vyākhyāyukti の二諦説 –Vasubandhu 研究ノート(2) –」, 『印度学仏教学研究』, 33-2, pp.114-120.
- 宮崎泉 (2007) 「『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳注」, 『京都大学文学部研究紀要』, 46, pp.1-126.
- Nanjio, B. (1923) *The Laṅkāvatārasūtra*, Bibliotheca Otaniensis, 1, Kyoto.
- Naudou, J. (1968) *Les Bouddhistes Kaśmīriens au Moyen Âge*, Paris.
- 西岡祖秀 (1980) 「『プトゥン仏教史』 目録部索引 I」, 『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』, 4, pp.61-92.
- 西岡祖秀 (1981) 「『プトゥン仏教史』 目録部索引 II」, 『同上』, 5, pp.43-94.
- 西岡祖秀 (1983) 「『プトゥン仏教史』 目録部索引 III」, 『同上』, 6, pp.47-201.

- Pema Tenzin (2002) *Suḥṛllekha of Ācārya Nāgārjuna and Vyaktapadāṭīkā of Ācārya Mahāmāti*, Bibliotheca Indo-Tibetica Series, 52, Vārāṇasī.
- Roerich, G. N. (1953) *The Blue Annals*, 2, Calcutta.
- Sastri, N. A. (1938) *Bhavasamkrānti Sūtra and Nāgārjuna's Bhavasamkrānti Śāstra with the Commentary of Maitreya-nātha*, Adyar.
- Shirasaki, K. (1985) "The Sugatamatavibhaṅgabhāṣya of Jitāri (II)," 『神戸女子大学紀要文学部篇』, 18-1, pp.101-143.
- 高橋尚夫 (1992) 「アーディカルマプラディーパ『初行のしるべ』-和訳」, 『興教大師覚鑿研究』, 春秋社, pp.551-589.
- 高橋尚夫 (1993) 「Ādikarmapradīpa 梵文校訂 -東京大学写本による-」, 『インド学密教学研究』, 下, 法蔵館, pp.129-156.
- 東北目録: 東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録 東北帝国大学蔵版』, 東京, 1934.
- Tola, F. and Dragonetti, C. (1986) "Āryabhavasamkrāntināmamahāyānasūtra: The noble sūtra on the passage through existences," *Buddhist Studies Review*, 3-1, pp.3-18.
- 津田明雅 (2006) 『Catuḥstava とナーガールジュナ -諸著作の真偽性』, 博士論文, 京都大学.
- 津田明雅 (2013) 「Nāgārjuna に帰せられる Bhavasamkrānti について」, 『印度学仏教学研究』, 62-1, pp.134-139.
- Tucci, G. (1956) *Minor Buddhist Texts I*, Roma.
- Vinītā, Bh. (2010) *A Unique Collection of Twenty Sūtras in a Sanskrit Manuscript from the Potala*, vols.I-1, -2, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, nos.7-1, -2, Beijing and Vienna.
- Williams, P. M. (1980) "Some aspects of language and construction in the Madhyamaka," *Journal of Indian Philosophy*, 8-1, pp.1-45.
- Zhang, B. (2001) "Mahāyānaviṃśakam edited with an introduction, notes, Shi Hu's version and translation by Zhang Baosheng," 『龍谷大学仏教文化研究所紀要』, 40, pp.10-28.

*Bhavasamkrānti* I (P no.5240)

(P tsa170v5)(N tsa161v1)(S tsa231r3)dBu ma srid pa 'pho ba 'zes bya ba

'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa b'zugs so<sup>45</sup> || ||<sup>46</sup> (D tsa151r1)(C tsa148r7)

rgya gar skad du | Bhavasam<sup>-DS</sup>krānti<sup>47</sup> | bod skad du | Srid pa 'pho ba | <sup>P</sup>

'Jam dpal g'zön nur gyur pa la phyag 'tshal <sup>(C 148v1)</sup>lo<sup>48</sup> ||

dños po med pas skye ba med || dños po med pa de <sup>N</sup>la ni ||

skye ba blañs pa srid pa yin || rtag tu dños po yod bsam pa ||

de<sup>49</sup> ltar bsam<sup>50</sup> <sup>S</sup>pa 'khrul pa yin || <sup>D</sup>nam <sup>P</sup>mkha'i<sup>51</sup> me tog dañ 'dra ba || 1

mkha' dañ mñam pa'i chos ñid la || de la skyes pa mkha' dañ mñam ||

rañ b'zin <sup>C</sup>thams cad mkha' dañ mñam || de <sup>N</sup>ltar mkhas pas rtogs par bya || 2

rgyu med 'bras <sup>S</sup>bu med pa dañ || <sup>P</sup>las kyi dños po med pa dañ || <sup>D</sup>

dños po thams cad 'di ltar med || 'jig rten 'di dañ pha rol dañ || 3

skye ba med pa'i ño bo ñid || de las g'zan ni skye bar byed ||

mo g'sam bu yi bu <sup>N</sup>la yañ || de la su <sup>(S 231v1)</sup>ni<sup>52</sup> skye bar <sup>(P 171r1)</sup>C<sup>mdzod</sup> || 4

'jig rten pa 'di sñar ma skyes || de las sus kyañ byas pa med || <sup>D</sup>

don med 'khor ba'i 'jig rten na || sgyu ma'i groñ khyer 'khyams pa b'zin || 5

yod med gañ yañ miñ<sup>53</sup> bstan pas<sup>54</sup> || chos <sup>P</sup>ñid kyi le'u<sup>55</sup> <sup>N</sup>ste dañ <sup>S</sup>po'o || ||

rnam rtog las ni 'jig rten 'byuñ || rnam rtog de las sems kyañ 'byuñ<sup>56</sup> || <sup>C</sup>

sams las lus kyañ <sup>D</sup>byuñ ba na || lus la brtag par gyis tsam na || 6

<sup>45</sup> b'zugs so Peking(P) / b'zugso Narthang(N), Golden manuscript(gSer bris: S)

<sup>46</sup> || P, S / || || N

<sup>47</sup> bhavasamkrānti *ego* / bha ba sam kra nti P, N, S / bha ba sam krā nti Derge(D), Cone(C)

<sup>48</sup> 'tshal lo P, D, N, C / 'tshalo S

<sup>49</sup> de P, D, C, S / da N

<sup>50</sup> bsam D, C / bsams P, N, S

<sup>51</sup> nam mkha'i P, D, C / namkha'i N, S

<sup>52</sup> su ni D, C / sus skye P, N, S, Sastri, N. A. (1938) (Sastri)

<sup>53</sup> miñ D, C / min P, N, S, Sastri

<sup>54</sup> pas P, N, S / pa D, C

<sup>55</sup> le'u P, D, N, C / le'a S

<sup>56</sup> 'byuñ D, C / byuñ P, N, S, Sastri

gzugs dañ tshor ba miñ dañ ni || <sup>P</sup>dños po stoñ ñid med <sup>S</sup>pa yin ||  
'du byed <sup>N</sup>dños po de yañ med || sems kyis<sup>57</sup> brtags<sup>58</sup> pa gañ yañ med ||  
sems ni rtog med ño bo yin || 7

phuñ po lña stoñ pa ñid du bstan <sup>D</sup>pa'i le'u ste gñis pa'o || || <sup>C</sup>

sems med <sup>P</sup>pas na chos <sup>S</sup>kyañ med || de ltar lus kyañ<sup>59</sup> khams kyañ med ||  
de ltar <sup>N</sup>gñis med lam gyis<sup>60</sup> ni || de ñid du ni rab tu bśad || 8

'di dag thams cad rten med yin || rten med du ni rab tu bśad ||  
blo ni rten med (<sup>D 151v1</sup>)byas <sup>P</sup>nas ni || de yañ rten med <sup>S</sup>'byuñ ba'o || 9

śes rab bstan pa'i le'u ste gsum <sup>C</sup>pa'o || ||

sbyin pa tshul (<sup>N 162r1</sup>)khrims bzod pa dañ || brtson 'grus bsam gtan śes rab sogs ||  
rtag tu de byas las kyis ni || myur ba'i <sup>P</sup>dus<sup>61</sup> su byañ chub thob ||<sup>62</sup> <sup>S</sup> 10<sup>63</sup>

thabs bstan <sup>D</sup>pa'i le'u ste bźi pa'o<sup>64</sup> || ||

thabs dañ śes rab gnas pa la || <sup>N</sup>de las skye<sup>65</sup> ba'i bdud rtsi ni ||

bla ma'i bka' yis zad pa <sup>C</sup>med || myur ba'i dus la rñed nas ni ||

thams cad <sup>P</sup>mkhyen pa the tshom med || 11

'di dag (<sup>S 232r1</sup>)thams cad miñ tsam yin ||<sup>66</sup> miñ gi khams <sup>D</sup>su rab tu gnas ||<sup>67</sup>

bśad byed de yañ<sup>68</sup> gud<sup>69</sup> du yañ<sup>70</sup> || bśad bya<sup>71</sup> <sup>N</sup>de yañ gañ na yod || 12

---

<sup>57</sup> kyis P, D, N, S / gyis C

<sup>58</sup> brtags P, N, S / brtag D, C

<sup>59</sup> kyañ P, N, S / dañ D, C

<sup>60</sup> gyis P, N, S / gyi D, C

<sup>61</sup> dus P, N, S / 'dus D, C

<sup>62</sup> || P, D, N, C / om. S

<sup>63</sup> dāna-śīla-kṣamā-vīrya-dhyānādīn sevayet sadā |

acireṇāiva kālena prāpyate bodhir uttamā || : *Ādikarmapradīpa* (de La Vallée Poussin, L. (1898) p.196.16-17, which is mentioned at Lindtner, Chr. (1982) p.13. n.19.)

<sup>64</sup> pa'o D, N, C, S / po P

<sup>65</sup> skye D, N, C, S / skyi P

<sup>66</sup> || P, D, N, C / | S

<sup>67</sup> || P, D, N, C / | S

<sup>68</sup> yañ D, C / mañ P, N, S, Sastri

<sup>69</sup> gud P, D, N, C, S / guñ Sastri

<sup>70</sup> yañ D, C / la P, N, S, Sastri

gañ las gañ byuñ miñ de ni || gañ las gañ byuñ chos<sup>P</sup>de rnams ||<sup>S</sup>  
 de ni med par 'gro<sup>(C 149r1)</sup>ba yin || chos de med pas chos ñid yin || 13  
 ma byuñ miñ ni stoñ ñid yin || de yañ<sup>D</sup>miñ du grub pa med ||  
 chos rnams thams cad miñ med<sup>N</sup>pa || miñ med du ni śin tu gsa<sup>l72</sup> ||<sup>(P 171v1)</sup> 14  
 da<sup>73</sup> ltar rnam rtog gañ byuñ ba ||<sup>74</sup> Sde yañ stoñ ñid rnam rtog yin || 15  
 mig gis<sup>75</sup> mthoñ ba'i gzugs de ni ||<sup>C</sup>de ñid mkhyen pas yod par bśad ||  
 rdzun<sup>76</sup> gyi ña rgyal 'jig rten<sup>D</sup>pa || kun rdzob sems pa<sup>77</sup> brten<sup>N</sup>pa<sup>P</sup> yin || 16  
 rten 'brel 'dzom pas mthoñ ba<sup>S</sup>gañ || der snañ ston pa 'dren pa yin ||  
 'dzin pa spyod pa'i sa yod par || don dam pa yi blo ma yin || 17  
 mig gis gzugs ni mthoñ mi 'gyur ||<sup>C</sup>sems chos de yañ<sup>P</sup>yod mi 'gyur ||<sup>D</sup>  
 gañ snañ thams cad rdzun<sup>78</sup> Ndu<sup>S</sup> bśad || 'jig rten pas ni gañ spañs pa ||  
 de ni don dam yin par bśad || 18  
 bden pa gñis bstan pa'i le'u ste lña pa'o || ||

dBu ma srid pa<sup>79</sup> 'pho ba źes bya ba<sup>80</sup> P 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad<sup>S</sup>pa rdzogs so<sup>81</sup>  
 || ||<sup>82</sup>

『中観 [派の] 生存の転生と名づけられる [論書]』 という、聖なるナーガールジュナ  
 がお作りになったものが収められる。

インド語で、*Bhavasamkrānti*、チベット語で『生存の転生』。  
 マンジュシュリー王子(Mañjuśrīkumārabhūta)に礼拝します。

---

<sup>71</sup> bya D, C / byed P, N, S, Sastrī  
<sup>72</sup> gsa<sup>l</sup> D, C / bsal P, N, S, Sastrī  
<sup>73</sup> da P, D, N, C, S / de Sastrī  
<sup>74</sup> || P, D, N, C / | S  
<sup>75</sup> gis P, D, N, C / gi S  
<sup>76</sup> rdzun P, N, S / brdzun D, C  
<sup>77</sup> pa D, C / dpa' P, N, S, Sastrī  
<sup>78</sup> rdzun P, N, S / brdzun D, C  
<sup>79</sup> pa P, N, S / pa'i D, C  
<sup>80</sup> ba D, C / ba || P / ba | N, S  
<sup>81</sup> rdzogs so P, D, C, S / rdzogso N  
<sup>82</sup> || || D, C, S / || P, N



1. [真実としては] 存在はないので生起はない。存在がないその場所で生起を獲得するのが[輪廻的]生存である。[そこで人々は、]常に存在があると考えよう。このように考えることは誤りである。[存在とは]空中の花のようなものである。

2. 空間に似た[世界を構成する]ものの状態(\*dharmatā)、その中で生じたものは、空間に等しい。あらゆる実体(\*svabhāva)は空間に等しい。このように、知識ある人は知らねばならない。

3. 原因はなく結果はなく、行為の存在はなく、あらゆる存在はこのように存在せず、この世と彼岸とは[存在しない]。

4. 生起することがないという本質[をもった]それから、他のものが生じさせられる。石女(子供の産めない女性)の息子という[その]息子においてもまた、彼においては誰が生みだす蔵(\*kośa)なのか。

5. この世間の人々は最初は生まれていなかった。そこからは、誰によっても作り出されることはない。対象のない[ところで輪廻的生存を]巡る世間においては、幻の街をさまようのと同様である。

存在も非存在も、どんなものも名称[にすぎない]と説くことによって、[以上が]ものの状態(\*dharmatā)の項、第1である。

6. 分別から世間は生じる。その分別から心も生じる。心から身体も生じたものであるならば、身体において分別されて作り出されたにすぎないので、

7. 色形(\*rūpa)や感受作用(\*vedanā)、名称といった存在は空の状態にあり、存在しないのである。生成作用(\*saṃskāra)といったその存在もまた、ない。心によって分別されたどんなものも存在しないのである。心は分別のないことを本質とする。

[以上が、心身の]5つの構成要素(五蘊)を空の状態(空性)において説く項、第2である。

8. 心は存在しないのだから、もの(\*dharma)もまた存在しない。同様に、身体も認識の要素(\*dhātu)も存在しない。このように2つのない道によって、真実として説かれる。

9. これらあらゆるものは抛り所がないのである。抛り所がないものとして説かれる。知恵は抛り所なく作られたものだから、それはさらに抛り所なく生じるものである。

[以上が]智慧を説く項、第3である。

10. 施し(\*dāna)、規則(\*śīla)、忍耐(\*kṣamā)、精進(\*vīrya)、瞑想(\*dhyāna)、智慧(\*prajñā)など常にそれ [ら] をなす行為によって、すばやくさとりが獲られる。

[以上が] 手だて(\*upāya)を説く項、第4である。

11. 手だてと智慧に立つとき、それから生じる甘露は、師のお言葉によって尽きることはない。すばやく獲得してから、すべてを知って、疑いがない。

12. これらあらゆるものは名称にすぎない。[あらゆるものは] 名称の領域に拠っている。説くことをなすそれ(\*abhidhāna)を離れて、説かれるべきそれ(対象, \*abhidheya)がさらに、どこに存在しようか。

13. あるものからあるものが生じた [と言うときの] その名称が、あるものからあるものが生じた [と言われる] それらもの(\*dharma)である。それは存在しないでさまようものである。そ [れら] もの(\*dharma)は存在しないので、[以上が真実の] ものの状態(\*dharmatā)である。

14. 名称が生じていないことが空の状態である。それはまた名称として成立することはない。あらゆるもの(\*dharma)は名称がない。名称がないものとして明らかにされる。

15. 同様に、分別が生み出したところのそれもまた、空であるとする分別である。

16. 眼によって見られるその色形は、真実を知る方によって、存在すると説かれる。誤った傲慢さ [をもつ] 世間の人々は世俗的な考えに依っているのである。

17. 依ってともに生じるものとして見ることを、そこで明らかに説いて導くのである。執着してふるまう境地が存在するところに、最高の意味(真実)の知恵はない。

18. 眼によって色形が見られることはないだろう。心 [によって] そのもの(\*dharma)もまた存在することはないだろう。あらゆる顕現したものを誤りとして説くところの、[また] 世間の人々が離れているところのそれは、最高の真実であると説かれている。

[以上が] 2つの真実(二諦)を説く項、第5である。

『中観 [派の] 生存の転生と名づけられる [論書]』という、聖なるナーガールジュナがお作りになったものを終わる。

*Bhavasamkrānti* II (P no.5472)

(P gi227r7)(N gi216r5)(S gi274v4)rgya gar skad du | Bhavasamkrānti<sup>83</sup> |

bod skad du | Srid pa las 'das pa |

'Jam dpal g'zön nur gyur pa la phyag 'tshal lo<sup>84</sup> ||

dños med dños <sup>P</sup>las mi skye ste || <sup>S</sup>dños po las kyañ skye ma yin ||

dños po rtag tu skye ba ste || dños 'khrul nam mkha'i<sup>85</sup> me tog b'zin || 1

mkha' dañ 'dra ba'i chos yod na || g'zān <sup>N</sup>ni mkha' dañ 'dra ba skye || (<sup>P</sup>227v1)

brten<sup>86</sup> nas thams cad mkha' dañ 'dra || de nas srid <sup>S</sup>pa med pa can || 2

ño bo ñid kyis las med ciñ || rgyu med 'bras bu yod ma yin ||

'di dag thams cad med pa ste || 'jig rten pa med 'jig<sup>87</sup> pa med || <sup>P</sup> 3

ma skyes (<sup>N</sup>216v1)pa yi dños po gañ || ji ltar g'zān 'zig skyed par 'gyur || (<sup>S</sup>275r1) 4

'jig rten dañ por ma byuñ ste || 'ga' 'zig gis kyañ sprul pa min ||

zla ba señ ge'i groñ khyer b'zin ||<sup>88</sup> 'jig rten don med<sup>89</sup> gyi na <sup>P</sup> 'khyam || 5

'jig rten rnam par rtog las byuñ || rnam rtog sems las <sup>N</sup>yañ <sup>S</sup>dag byuñ ||

sams ni lus la brten pa ste || de phyir lus la rnam dpyad do ||<sup>90</sup> 6

gzugs ni stoñ pa tshor ba rañ b'zin med || <sup>P</sup> 'du śes med de 'du byed yod ma yin ||

'byuñ ba spañs nas sems dañ sems byuñ med || de phyir <sup>S</sup>lus ni rtog bral ño <sup>N</sup>bo yin || 7

sams med chos rnams de dag med || lus med khams rnams yod ma yin || <sup>P</sup>

gñis su med pa'i las 'di ni || de ñid rig pa rnams kyis bstan || 8

'di dag thams cad dmigs med par || dmigs <sup>S</sup>su<sup>91</sup> med par bstan pa yin ||

blo ni dmigs <sup>N</sup>pa med byas nas || dmigs <sup>P</sup>pa med par 'byuñ bar 'gyur || 9

sbyin dañ tshul khrims bzod brtson 'grus ||<sup>92</sup> bsam gtan la sogs bsten<sup>93</sup> byas na ||

<sup>83</sup> bhavasamkrānti *ego* / bha ba sam kra nta P, N, S

<sup>84</sup> 'tshal lo P, N / 'tshalo S

<sup>85</sup> nam mkha'i P / namkha'i N, S

<sup>86</sup> brten P, S / brtan N

<sup>87</sup> 'jig P, S / 'jigs N

<sup>88</sup> || P, S / | N

<sup>89</sup> med S / miñ P, N

<sup>90</sup> || P, S / | N

<sup>91</sup> dmigs su P, S / dmigsu N

yun mi riñ ba'i dus kyis ni || <sup>S</sup>byañ chub dam pa thob par 'gyur || 10  
thabs dañ śes rab la <sup>P</sup>gnas te || <sup>N</sup>sems can rnam la brtse bar<sup>94</sup> bya ||  
myur ba kho nar thams cad mkhyen || thob par 'gyur bar the tshom med || 11  
'di dag thams cad miñ tsam ste || 'du <sup>S</sup>śes tsam la rab tu gnas || <sup>P</sup>  
rjod<sup>95</sup> par byed las tha dad<sup>96</sup> pa'i || brjod par bya ba yod ma yin || <sup>N</sup> 12  
chos rnam thams cad miñ med do || bdag med par yañ yoñs su<sup>97</sup> gsal || 13  
yañ dag min pa'i chos 'di dag | rnam par <sup>(P 228r1)</sup>rtog <sup>(S 275v1)</sup>pas kun nas bsłañ ||  
gañ gis stoñ pa źes brtags pa'i || rtog pa de yañ 'di stoñ ño || 14  
mig gis gzugs rnam <sup>N</sup>mthoñ bar ni || de ñid gsuñs pas gañ bśad pa || <sup>P</sup>  
log par źen pa'i 'jig rten la || kun rdzob bden <sup>S</sup>par brjod pa yin || 15  
gañ du tshogs par mthoñ ba ni || 'dren pas ston par byed pa yin ||  
blo dañ ldan pas don dam gyi || ñe bar brtags pa'i sa de <sup>P (N 217r1)</sup>gsuñs || 16  
mig gis gzugs ni mi mthoñ ste || yid kyis chos rnam mi <sup>S</sup>rig go |  
'jig rten pa yi yul min gañ || 'di ni mchog tu bden pa'o || 17  
mig med gzugs kyañ yod min źiñ || snañ <sup>P</sup>ba yid la byed pa med ||  
sems ni rmi <sup>N</sup>lam bźin du 'khrul || thams cad yod min med pa'añ min || <sup>S</sup> 18

Srid pa las 'das pa slop dpon 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa rdzogs so || || <sup>P</sup>kha  
che'i pa ñđi ta Śrīratha<sup>98</sup> dañ | źu chen gyi lo tsā ba dge sloñ Grags 'byor śes rab <sup>N</sup>kyis  
bsgyur ba'o || ||

インド語で、*Bhavasamkrānti*、チベット語で『生存の超越』。  
マンジュシュリー王子(Mañjuśrīkumārabhūta)に礼拝します。

<sup>92</sup> || P, S / | N

<sup>93</sup> bsten N, S / bstan P

<sup>94</sup> bar P, N / par S

<sup>95</sup> rjod P, N / brjod S

<sup>96</sup> dad P, S / dañ N

<sup>97</sup> yoñs su P, N / yoñsu S

<sup>98</sup> śrīratha *ego* / śrī tha ra tha P, N, S

1. 非存在は存在から生じない。存在？からも生じることはない。存在は常に生じている。存在は欺く [性質をもった] ものであり、空中の花と同じである。

2. 空間と似たもの(\*dharma)が存在するならば、他のものは空間と同様に生じる。依存して、あらゆるものは空間と同様に [生じる]。そこから [輪廻的] 生存は非存在をとまなう。

3. 本性として行為は存在しないし、原因はなく結果があることもない。これらあらゆるものは存在しない。世間の人々は存在せず、滅することはない。

4. 生じることのないどんなものが、どのように、ある他のものを生み出さだろうか。

5. 世間はもともと生じてはいない。何によっても作り出されることはない。月 [の] ライオンの街?のように、世間という対象はなく、劣った [人々] はさまよう。

6. 世間は分別から生じたもので、分別は心から生じたものである。心は身体に依存している。それゆえ身体において考察される。

7. 色形(\*rūpa)は空であり、感受作用(\*vedanā)は実体(\*svabhāva)がなく、呼称(\*saṃjñā)は存在せず、生成作用(\*saṃskāra)が存在することはない。生じるということから離れて、心と心から生じたものは存在しない。それゆえ、身体は分別を離れた性質 [をもつ]。

8. 心は存在せず、それら諸々のもの(\*dharma)は存在しない。身体は存在せず、[認識の] 諸要素(\*dhātu)が存在することはない。2 つ [の側面をもつもの] として存在しないこの行為が真実を知る方々によって説かれた。

9. これらあらゆるものは拠り所がなく、拠り所として存在しないと説かれるのである。知恵は拠り所なく作られたものだから、拠り所のないものとして生じるだろう。

10. 施し(\*dāna)や規則(\*śīla)や忍耐(\*kṣamā)や精進(\*vīrya)や瞑想(\*dhyāna)などに依れば、速やかに最高のさとりが獲られるだろう。

11. 手だて(\*upāya)と智慧(\*prajñā)に立って、命あるものたちを慈しまねばならない。実にすばやくあらゆるものを知ること(\*sarvajña)を獲て、疑いがない。

12. [世間の] これらあらゆるものは名称にすぎず、呼称にすぎないものに拠っている。言語表現することから離れた言語表現されるべきものがあることはない。

13. あらゆるもの(\*dharma)は名称がない。自我がないものとしても明らかにされる。

14. 真実でないこれらのもの(\*dharma)は分別によって作り出される。空であると考えるところのそれやこれの分別もまた、空である。

15. 眼によって諸々の色形は見られると、真実をお説きになった方によって説かれた [そのことは、] 誤った執着をもつ世間に対して、世俗的な真実が述べられたものである。

16. 何において集められたものが見られるのかについて、導く方は説くことをなすのである。知恵ある方は、最高の意味についてよく観察するその境地をお説きになった。

17. 眼によって色形は見られない。心によって諸々のもの(\*dharma)は理解されない。世間の人々の [理解の] 領域にないこれは、最高の真実である。

18. 眼は存在せず、色形も存在することなく、顕現するものは心で作られ、存在しない。心は夢のように錯乱している。あらゆるものは存在するのではなく、存在しないのでもない。

『生存の超越』という、師である聖なるナーガールジュナがお作りになったものを終わる。カシュミールの学者 Śrīratha と、校訂主任の翻訳僧 Grags 'byor śes rab によって翻訳された。

*Bhavasamkrānti* III (P no.5662)

(P 18)(N 196v7)(S 245v3) Srid pa las 'das pa zes bya ba bžugs so<sup>99</sup> || ||<sup>100</sup>

(D 167v1)(C 176v5) rgya gar Dskad du | (N 197r1) Bhavasamkrāntiparikathā<sup>101</sup> |

bod skad du | Srid pa las 'das pa'i Sgtam ||<sup>102</sup>

'Jam dpal gžon nur (P201v1)gyur pa la phyag 'tshal lo ||<sup>103</sup>

dños med dnös las mi skye ste || dnös med las kyañ skye ma yin ||

dnös po rtag Ntu skye Cba ste || dnös 'khrul nam mkha'i<sup>104</sup> me tog bžin ||<sup>D</sup> 1

mkha' dañ 'dra ba'i chos yod na || Sgžan ni mkha' dañ 'dra ba skye<sup>105</sup> ||<sup>106</sup> P

brten nas thams cad mkha' dañ 'dra ||<sup>107</sup> de nas srid pa med pa can || 2

ño bo ñid kyis<sup>108</sup> las med ciñ || rgyu med 'bras Nbu yod ma yin ||

'di dag thams cad Cmed pa ste || 'jig rten pa med 'jig<sup>109</sup> Spa med ||<sup>110</sup> 3

ma skyes PDpa yi dnös po gañ || ji ltar gžan žig skyed<sup>111</sup> par 'gyur || 4

'jig rten dañ por ma byuñ ste || 'ga' žig gis kyañ sprul pa min<sup>112</sup> ||

zla ba Nseñ ge'i groñ khyer bžin || 'jig rten don med gyi na 'khyam<sup>113</sup> ||<sup>(C177r1)</sup> 5

'jig (S 246r1) rten rnam Ppar rtog las 'byuñ || rnam rtog sems las yañ dag D'byuñ<sup>114</sup> ||

sams ni lus la brten pa ste || de phyir lus ni rnam dpyad do || 6

gzugs ni stoñ Npa tshor ba rañ bžin med || 'du šes med de<sup>115</sup> 'du Sbyed yod ma yin || P

<sup>99</sup> bžugs so P, D, C / bžugso N / bžugs S

<sup>100</sup> || || P, D, C, S / N

<sup>101</sup> bhavasamkrāntiparikathā *ego* / bha ba sañ krā nta pa ri ka thā P, N, S / bhā ba sam krān ta pa ri ka thā D, C

<sup>102</sup> | D, C / || P, N, S

<sup>103</sup> 'tshal lo || P, D, C, S / 'tshal | N

<sup>104</sup> nam mkha'i P, D, C / namkha'i N, S

<sup>105</sup> skye P, D, N, C / ste S

<sup>106</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>107</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>108</sup> kyis D, C / kyi P, N, S

<sup>109</sup> 'jig D, C / 'jigs P, N, S

<sup>110</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>111</sup> skyed D, C / skyes P, N, S

<sup>112</sup> min D, C / yin P, N, S

<sup>113</sup> 'khyam P, N, S / 'khyams D / 'byams C

<sup>114</sup> 'byuñ D, C / byuñ P, N, S

<sup>115</sup> med de P, D, N, C / mede S

'byuñ ba spañs nas sems dañ sems byuñ<sup>116</sup> Cmed || de phyir lus ni rtog bral ño bo yin ||

7

sems med chos rñams de dag<sup>D</sup>med ||<sup>117</sup> lus med<sup>118</sup> kñams rñams<sup>119</sup> Nyod ma yin ||

gñis su<sup>120</sup> med<sup>121</sup> pa'i las<sup>S</sup>'di ni || de ñid<sup>P</sup>rig<sup>122</sup> pa rñams kyis<sup>123</sup> bñtan || 8

'di dag thams cad dmigs med par || gñis su<sup>124</sup> med par bñtan pa yin ||<sup>C</sup>

blo ni dmigs pa med byas nas || dmigs pa med par<sup>N</sup> 'byuñ<sup>S</sup>bar 'gyur || 9

sbyin dañ tshul khñims<sup>P</sup>bzod brñson<sup>D</sup> 'grus || bsam gñtan la sogs brñten byas nas ||

yun mi riñ ba'i dus kyis ni || byañ chub dam pa thob par 'gyur || 10

thabs<sup>125</sup> dañ šes rab la gñas te || sems<sup>(N 197v1)</sup>Ccan rñams<sup>S</sup>la brñse bar bya ||<sup>P</sup>

myur ba kho nar thams cad mkhyen || thob par 'gyur bar the tshom med || 11

'di dag thams<sup>(D 168r1)</sup>cad miñ tsam ste || 'du šes tsam la rab tu gñas ||

rñod par byed las tha dad pa'i || brñod par bya ba yod ma yin ||<sup>126 (P 202r1) NS</sup> 12

chos rñams thams cad miñ med de || bdag med par<sup>C</sup>yañ yoñs su<sup>127</sup> gñsal || 13

yañ dag min pa'i chos 'di dag | rñam par rtog pas kun nas bsñañ ||

gañ<sup>D</sup>gis stoñ pa žes brñtags pa'i ||<sup>P</sup>rtog pa de yañ 'dis stoñ ño || 14

mig<sup>(S 246v1)</sup>gis<sup>N</sup>gzugs rñams mthoñ bar ni || de ñid gñsuñs pas gañ bñad pa ||

log par žen pa'i<sup>128</sup> 'jig rñen la ||<sup>C</sup>kun rdzob bñen par brñod pa yin || 15

gañ du tshogs<sup>129</sup> par<sup>P</sup>mthoñ ba ni || 'dren pas ston par byed pa yin ||

blo dañ<sup>DS</sup>ldan pas<sup>N</sup>don dam gyi || ñe bar brñtags pa'i sa de gñsuñs || 16

mig gñs gñugs ni mi mthoñ ste ||<sup>130</sup> yid kyis chos rñams mi rig go ||<sup>131</sup>

---

<sup>116</sup> byuñ P, N, C, S / byur D

<sup>117</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>118</sup> med P, D, C, S / mad N

<sup>119</sup> rñams P, D, C, S / rñam N

<sup>120</sup> gñis su P, D, N, C / gñisu S

<sup>121</sup> med P, N, C, S / mod D

<sup>122</sup> rig D, C, S / rigs P, N

<sup>123</sup> kyis P, N, C, S / gyis D

<sup>124</sup> gñis su P, D, N, C / gñisu S

<sup>125</sup> thabs P, D, N, C / thab S

<sup>126</sup> || P, C, S / | D, N

<sup>127</sup> yoñs su P, D, N, C / yoñsu S

<sup>128</sup> pa'i P, D, N, S / la'i C

<sup>129</sup> tshogs D, N, S / chogs P, C

<sup>130</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>131</sup> | P, N, S / || D, C



'jig rten <sup>P</sup>pa yi yul min gañ ||<sup>132</sup> C 'di ni mchog tu bden pa'o || 17  
 mig med gzugs <sup>S</sup>kyañ yod min žiñ || snañ ba <sup>N</sup>yid la byed pa med ||  
 sems ni rmi lam bžin <sup>D</sup>du 'khrul || thams cad yod min med pa'añ min || <sup>P</sup> 18

Srid pa las 'das pa'i gtam<sup>133</sup> slop dpon 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa rdzogs so<sup>134</sup>  
 || || <sup>N</sup> (C 177v1) <sup>S</sup>kha che'i pa nđi ta Śrīratha<sup>135</sup> dañ | lo tsā ba dge sloñ Grags 'byor śes rab  
 kyis bsgyur ba'o<sup>136</sup> || ||<sup>137</sup>

『生存の超越と名づけられる [論書]』 が収められる。

インド語で、*Bhavasamkrāntiparikathā*、チベット語で『生存の超越の話』。  
 マンジュシュリー王子(Mañjuśrīkumārabhūta)に礼拝します。

1. 非存在は存在から生じない。非存在からも [存在が] 生じることはない。存在は常に生じている。存在は欺く [性質をもった] ものであり、空中の花と同じである。

2. 空間と似たもの(\**dharma*)が存在するならば、他のものは空間と同様に生じる。依存して、あらゆるものは空間と同様に [生じる]。そこから [輪廻的] 生存は非存在をとまなう。

3. 本性として行為は存在しないし、原因はなく結果があることもない。これらあらゆるものは存在しない。世間の人々は存在せず、滅することはない。

4. 生じることのないどんなものが、どのように、ある他のものを生み出すだろうか。

5. 世間はもともと生じてはいない。何によっても作り出されることはない。月 [の] ライオンの街?のように、世間という対象はなく、劣った [人々] はさまよう。

6. 世間は分別から生じ、分別は心から生じる。心は身体に依存している。それゆえ身体が考察される。

7. 色形(\**rūpa*)は空であり、感受作用(\**vedanā*)は実体(\**svabhāva*)がなく、呼称(\**saṃjñā*)は存在せず、生成作用(\**saṃskāra*)が存在することはない。生じるということ

<sup>132</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>133</sup> gtam D, C / gtam || P, N, S

<sup>134</sup> rdzogs so P, D, C / rdzogso N, S

<sup>135</sup> śrīratha *ego* / śrī ra tha D, C / śrī ra thā P, N, S

<sup>136</sup> ba'o D, N, C, S / pa'o P

<sup>137</sup> || || P, N, S / || D, C

を離れて、心と心から生じたものは存在しない。それゆえ、身体は分別を離れた性質[をもつ]。

8. 心は存在せず、それら諸々のもの(\*dharma)は存在しない。身体は存在せず、[認識の] 諸要素(\*dhātu)が存在することはない。2 つ [の側面をもつもの] として存在しないこの行為が真実を知る方々によって説かれた。

9. これらあらゆるものは抛り所がなく、2 つとして存在しないと説かれるのである。知恵は抛り所なく作られたものだから、抛り所なく生じるだろう。

10. 施し(\*dāna)や規則(\*śīla)や忍耐(\*kṣamā)や精進(\*vīrya)や瞑想(\*dhyāna)などに依って、速やかに最高のさとりが獲られるだろう。

11. 手だて(\*upāya)と智慧(\*prajñā)に立って、命あるものたちを慈しまねばならない。実にはすばやくあらゆるものを知ること(\*sarvajña)を獲て、疑いがない。

12. [世間の] これらあらゆるものは名称にすぎず、呼称にすぎないものに拠っている。言語表現することから離れた言語表現されるべきものがあることはない。

13. あらゆるもの(\*dharma)は名称がない。自我がないものとしても明らかにされる。

14. 真実でないこれらのもの(\*dharma)は分別によって作り出される。空であると考えるところのその分別もまた、それゆえ、空である。

15. 眼によって諸々の色形は見られると、真実をお説きになった方によって説かれた[そのことは、]誤った執着をもつ世間に対して世俗的な真実が述べられたものである。

16. 何において集められたものが見られるのかについて、導く方は説くことをなすのである。知恵ある方は、最高の意味についてよく観察するその境地をお説きになった。

17. 眼によって色形は見られない。心によって諸々のもの(\*dharma)は理解されない。世間の人々の[理解の] 領域にないこれは、最高の真実である。

18. 眼は存在せず、色形も存在することなく、顕現するものは心で作られ、存在しない。心は夢のように錯乱している。あらゆるものは存在するのではなく、存在しないでもない。

『生存の超越の話』という、師である聖なるナーガールジュナがお作りになったものを終わる。カシュミールの学者 Śrīratha と翻訳僧 Grags 'byor śes rab によって翻訳された。

*Bhavasam̐cara* (P no.3124)

(P tsi141r1) dÑos po spyod źes bya ba bźugs || ||

(D źi127v1)(N tsi128v7)(C źi127v7) (S tsi177r4) rgya gar skad du | Bhavasam̐cara-nāma<sup>138</sup> |

bod skad du | dÑos po spyod pa<sup>139</sup> (C 128r1) źes bya ba |<sup>140</sup>

Saṅs rgyas la phyag 'tshal lo<sup>141</sup> ||

dños po med la dños<sup>D</sup> por śes || dños med<sup>P</sup> skye ba yod ma yin ||

rtag tu skye ba dños po ñid || (N 129r1) dños<sup>S</sup> 'khrul nam mkha'i<sup>142</sup> me tog bźin || 1

mkha' dañ mñam pa'i chos rnam ni || Cskye ba mkha' dañ mñam ñid mchog |

thams cad rañ bźin gyis mkha' mñam || des na srid<sup>PD</sup> pa dam pa'i dños || 2

rgyu med 'bras bu<sup>S</sup> med pa<sup>N</sup> ste || las kyi rañ bźin yod ma yin ||

'jig rten pa med 'jig rten med || 'di dag thams cad bden ma yin ||<sup>C</sup> 3

ma skyes<sup>143</sup> pas ni dños po gañ || ji ltar gźan las śes par<sup>P</sup> 'gyur ||

mo gśam gyi ni<sup>D</sup> (S 177v1) bu ñid kyañ || de tshe skye bar 'gyur<sup>144</sup> ma yin || 4

'jig<sup>N</sup> rten gzod nas ma skyes te || gañ gis kyañ ni sprul ma yin ||

don med 'khrul pa'i 'jig rten 'di || Czla ba bzañ po'i groñ khyer bźin || 5

'jig rten rnam<sup>P</sup> par rtog las<sup>145</sup> s 'byuñ || rnam rtog sems<sup>D</sup> las byuñ ba ste ||

gañ phyir lus las sems byuñ bas || Nde phyir lus la rnam par brtag | 6

gzugs stoñ tshor ba rañ bźin med || 'du śes med ciñ 'du byed<sup>C</sup> med ||

sems byuñ med ciñ<sup>146</sup> PS dños po med || de phyir mi rtog rañ bźin no || 7

des na sems<sup>D</sup> min chos kyañ min || lus min khams la sogs pa min ||

gñis<sup>N</sup> su med pa'i lam 'di ni || de ñid rig pa rnam kyis gsuñs || 8

dmigs pa<sup>S</sup> med pa'i<sup>C</sup> chos<sup>147</sup> 'di<sup>P</sup> kun || dmigs pa med par rab tu bstan<sup>148</sup> ||

<sup>138</sup> bhavasam̐caranāma *ego* / bha ba sa ñtsa ra nā ma D, C / bhā ba sa ñtsa ra nā ma P, N, S

<sup>139</sup> pa D, C / om. P, N, S

<sup>140</sup> | P, D, N, C / || S

<sup>141</sup> 'tshal lo P, D, N, C / 'tshalo S

<sup>142</sup> nam mkha'i P, D, C / namkha'i N, S

<sup>143</sup> skyes P, N, C, S / skyas D

<sup>144</sup> 'gyur P, D, C / gyur S / gyuñ N

<sup>145</sup> las D, C / la P, N, S

<sup>146</sup> ciñ D, C / de P, N, S

dmigs pa med pa'i blo byas na<sup>149</sup> || dmigs<sup>D</sup>pa med par 'gyur ba yin || 9  
 sbyin dañ tshul khriṃs bzod brtson<sup>N</sup> 'grus || bsaṃ gtaṃ las byuñ bsten<sup>S</sup>par bya ||  
 dus mi riñ ba ñid na ni ||<sup>P</sup>bla med<sup>C</sup>byañ chub thob par 'gyur || 10  
 śes rab thabs la gnaṃ gyur pas || seṃs caṃ kuṃ la brtse bar bya ||<sup>(D 128r1)</sup>  
 thams cad mkhyen pa'i go 'phañ mchog | lha ñid dus mi riñ bar<sup>N</sup> 'thob ||<sup>150 S 11</sup>  
 'di dag thams cad miñ tsam ste ||<sup>151</sup> tha sñad<sup>(P 141v1)</sup>tsam du rab tu 'jug |<sup>(C 128v1)</sup>  
 dños po med la tha dad pa'i || brjod bya yod pa ma yin te ||<sup>152</sup> 12  
 bdag ñid gañ dañ gañ<sup>D</sup>gis ni || chos rnaṃs gañ dañ gañ brtags<sup>153</sup> pa ||  
 de ni de la yod<sup>(S 178r1)</sup>miñ te || chos rnaṃs kyi ni<sup>(N 129v1)</sup>chos ñid de || 13  
 miñ gis<sup>P</sup>miñ ñid stoñ pas ni<sup>154</sup> || miñ la miñ ni yod ma yin ||  
 chos<sup>C</sup>rnaṃs thams cad miñ med pas || miñ ni btags<sup>155</sup> pa tsam<sup>156</sup> ñid do ||<sup>D 14</sup>  
 mi bden par<sup>S</sup>gyur chos 'di dag | brtags pa ñid du rab tu 'jug |  
 gañ la brtags pa de<sup>N</sup>med na || stoñ<sup>P</sup>pa ñid du brtags pa gañ || 15  
 mig gis mthoñ ba'i gzugs rnaṃs ni ||<sup>C</sup>de ñid rig pa źes de bśad ||  
 'jig rten log<sup>S</sup>pa'i ña rgyal caṃ || kuṃ rdzob<sup>D</sup>bden pa źes 'dir 'jog | 16  
 gañ du tshogs pa'i rkyen mthoñ ba || 'dren pa gsaḷ<sup>P</sup>bar gyur pa yin ||<sup>N</sup>  
 blo dañ ldan pas don dam la || brtags te grags pa ñes par mthoñ || 17  
 gzugs<sup>C</sup>ni mig gis mi mthoñ źiñ || yid kyiṃs chos rnaṃs mi rig<sup>D</sup>pa ||  
 'di ni mchog tu bden pa ste || 'jig rten gañ gis kyañ mi śes ||<sup>P 18</sup>

dÑos po spyod pa źes bya ba<sup>N</sup>slop dpon chen po 'phags pa Klu sgrub kyi<sup>S</sup>źal śña nas  
 mdzad pa rdzogs so<sup>157</sup> || || rgya gar gyi mkhan<sup>C</sup>po Vajrapāṇi<sup>158</sup> dañ | bod kyi lo tsā<sup>159</sup>

<sup>147</sup> chos D, N, C, S / chas P

<sup>148</sup> bstaṃ P, D, N, C / brtaṃ S

<sup>149</sup> na P, D, N, S / pa C

<sup>150</sup> || P, D, N, C / om. S

<sup>151</sup> || P, N, C, S / | D

<sup>152</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>153</sup> brtags P, D, N, S / bdags C

<sup>154</sup> ni P, N, S / na D, C

<sup>155</sup> btags D, C / brtags P, N, S

<sup>156</sup> tsam P, N, C, S / caṃ D

<sup>157</sup> so P, D, C / s-ho N, S

<sup>158</sup> vajrapāṇi *ego* / ba dzra pā ṇi P, N, C, S / ba jra pā ṇi D

<sup>159</sup> tsā D, C / ts̄sha P, N, S

『存在のふるまいと名づけられる [論書]』が収められる。

インド語で、*Bhavaśamcara-nāma*、チベット語で『存在のふるまいと名づけられる [論書]』。ブツダに礼拝します。

1. 存在がないときに存在が知られる。非存在が生じることはない。常に生じているのが存在である。存在は欺く [性質をもった] ものであり、空中の花と同じである。

2. 空間と類似した諸々のもの(\**dharmā*)は、生起が空間と最もよく似ている。あらゆるものは本性(\**svabhāva*)としては空間に似ている。それゆえ [それが、輪廻的] 生存 [の] 最高の真理(\**paramārtha*)である。

3. 原因はなく結果はない。行為の実体(\**svabhāva*)があることはない。世間の人々は存在せず、世間は存在しない。これらあらゆるものは真実ではない。

4. 生じることがないので、どんなものが、どのように、他のものから [その存在性を] 知られようか。石女(子供の産めない女性)の息子もまた、そのとき生まれるということはない。

5. 世間は最初から生じていたのではない。何によっても作り出されることはない。対象が存在せず、欺く [性質をもつ] この世間は、美しい月の街と同様である。

6. 世間は分別から生じる。分別は心から生じたものである。身体から心が生じたのであるから、身体において分別されるのである。

7. 色形(\**rūpa*)は空であり、感受作用(\**vedanā*)は実体(\**svabhāva*)がなく、呼称(\**saṃjñā*)は存在せず、生成作用(\**saṃskāra*)は存在しない。心が生じることはなく、存在はない。それゆえ [すべてのものは] 分別を離れた本性(\**svabhāva*) [をもつ]。

8. それゆえ心は [存在] せず、ものも [存在] せず、身体は [存在] せず、[認識の] 要素(\**dhātu*)などは [存在] しない。2 つとして存在しないこの道を、真実を知る方々はお説きになった。

9. 抛り所がないこれらあらゆるもの(\**dharmā*)は抛り所がないと説かれた。抛り所が

---

<sup>160</sup> || || dge'o || || P / || || dge'o || N, S / || D, C

ない知恵が作られるのだから、[ものは] 拠り所がないことになるだろう。

10. 施し(\*dāna)や規則(\*śīla)や忍耐(\*kṣamā)や精進(\*vīrya)や瞑想(\*dhyāna)から生まれたものによって、速やかに無上のさとりが獲られるだろう。

11. 智慧(\*prajñā)と手だて(\*upāya)に立って、あらゆる命あるものたちを慈しまねばならない。すべてを知る方(\*sarvajñā)の最高の境地である神性を速やかに獲る。

12. これらあらゆるものは名称にすぎない。呼称(\*saṃjñā)にすぎないものとして生じている。存在がないとき(\*abhāvāt?)、異なる言語表現されるべきもの(対象)があることはない。

13. あれこれの自我によってあれこれの諸々のもの(\*dharma)が構想される。それ(自我)はそれ(もの)において存在することはない。[それが] 諸々のものものの状態(\*dharmatā)である。

14. 名称として名称自体は空であるので、名称の中に名称が存在することはない。あらゆるもの(\*dharma) [に] は名称がないので、名称は付与されたにすぎないものである。

15. 真実でないものとして生じたこれらのもの(\*dharma)は、他ならぬ分別において生じる。[そこでは] 空であると考え、その分別 [さえ] 存在しないのだから。

16. 眼によって見られる諸々の色形が真実の知識であると、そのように説かれる。誤った傲慢さをもつ世間 [に対して、それが] 世俗的な真実であると、ここに立てられる。

17. [そこで] 集合した条件を見るところを導く方が明らかにしたところの、[その境地で] 知恵ある方が最高の意味について考えたという(?)名声が確かに見られる。

18. 色形は眼によって見られないし、心によって諸々のもの(\*dharma)は理解されない。これは最高の真実である。世間の誰によっても [この真実は] 知られない。

『存在のふるまいと名づけられる [論書』』という、偉大な師である聖なるナーガールジュナ御前がお作りになったものを終わる。インドの学者 Vajrapāṇi と、チベットの翻訳官 rMa ban chos 'bar によって翻訳され訂正されて、確立された。幸あれ(\*śubham)。

*Nirvikalpaprakaraṇa* (P no.3126)

(P tsi146r8)(N tsi134v3)(S tsi187r1) rNam par mi rtog pa rab tu byed pa

Ā rya de bas <sup>N</sup>mdzad pa bźugs || ||<sup>161</sup> (S 187v1)

(D ži133r4)(C ži133r7) rgya gar skad du | Nirvikalpaprakaraṇa<sup>162</sup> |

bod skad du | rNam par mi rtog pa'i rab tu byed pa |

bla ma dañ <sup>(P 146v1)</sup> Sañs rgyas la phyag 'tshal lo<sup>163</sup> ||

rnam par rtog pa gañ gañ <sup>D</sup>gis || dños po gañ dañ <sup>S</sup>gañ <sup>(C 133v1)</sup> brtags pa ||

yoñs <sup>N</sup>su<sup>164</sup> brtags pa 'di ñid dag | rañ bźin yod min pa kho na || 1

slop dpon Klu sgrub źal sña yi || lam <sup>P</sup>las phyi rol soñ gyur ciñ ||

legs par mñon pa'i thabs med pa'i || kun rdzob de <sup>D</sup>ñid <sup>S</sup>bden pa las || 2

ñams pas thar pa'i <sup>C</sup>dños grub ni || yod <sup>N</sup>pa ma yin de dag ñams ||

gañ žig las las byuñ ba yi || rnam <sup>P</sup>par rtog pa gañ ci'añ ruñ || 3

de dag spañs pa'i rañ bźin las || mya ñan 'das pa <sup>S</sup>gźan na ni ||

yod<sup>165</sup> <sup>D</sup>min yul ni gañ du yañ || rnam par mi sems bdag ñid do || 4

gañ yañ <sup>C</sup>dga' <sup>N</sup>ba'i rañ bźin gyis || sems la <sup>P</sup>bde ba 'byuñ gyur ciñ ||

ñams su myoñ ba'i sar phyin pa || de yañ kun tu<sup>166</sup> rtog pa <sup>S</sup>tsam ||<sup>167</sup> 5

gañ de 'dod chags bral ba yi || <sup>(D 133v1)</sup> rañ gi ño bo de dag dañ ||

gñis po gañ yin pa de ni ||<sup>168</sup> srid pa'i rgyu yi mchog yin no || 6

dños po <sup>P(N 135r1)</sup> <sup>C</sup>dños po las mi skye ||<sup>169</sup> dños po dños med las kyañ min ||

dños po skye ba <sup>S</sup>rtag tu spañs<sup>170</sup> || dños<sup>171</sup> 'khrul nam mkha'i<sup>172</sup> me tog bźin || <sup>D</sup> 7

<sup>161</sup> || P, N / || S

<sup>162</sup> nirvikalpaprakaraṇa *ego* / ni rbi ka lpa pra ka ra ṇa N, S / ni rba ka lpa pra ka ra ṇa P / nir bi ka lpa pra ka ra ṇa D, C

<sup>163</sup> 'tshal lo P, D, N, C / 'tshalo S

<sup>164</sup> yoñs su P, D, N, C / yoñsu S

<sup>165</sup> yod P, N, S / yoñ D, C

<sup>166</sup> tu P, N, S / du D, C

<sup>167</sup> || P, D, N, C / | S

<sup>168</sup> || P, D, C / | N, S

<sup>169</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>170</sup> spañs D, C / spañ P, N, S

<sup>171</sup> dños P, D, N, S / dñas C

<sup>172</sup> nam mkha'i P, D, C / namkha'i N, S

mkha' dañ mñam pa'i chos rnam kun || skye ba mkha' dañ mñam pa ñid ||  
 rkyen ni <sup>P</sup>mkha' <sup>N</sup>dañ mñam kun ñes || srid par <sup>C</sup>gyur pa bden pa yin || 8  
 rgyu med 'bras bu med (<sup>S 188r1</sup>)gyur ciñ ||<sup>173</sup> las kyi rañ bžin yod ma yin ||  
 'jig rten pa med <sup>D</sup>'jig rten med || mi bden<sup>174</sup> par gyur chos 'di kun || 9  
 ma skyes pas ni dños po <sup>P</sup>gañ || ji ltar gžan las <sup>N</sup>śes par gyur ||  
 mo gśam<sup>175</sup> <sup>S</sup>bu yi bžin<sup>176</sup> <sup>C</sup>yañ ni || de ltar śes par mi nus so || 10  
 'jig rten gzod<sup>177</sup> nas ma skyes te ||<sup>178</sup> gañ gis <sup>D</sup>kyañ ni sprul pa med ||  
 don med 'khrul pa'i 'jig rten 'di || dri za'i groñ <sup>P</sup>khyer ji bžin no || 11  
 rnam rtog las gañ 'jig <sup>N</sup>rten <sup>S</sup>'byuñ || rnam rtog sems las byuñ ba ste ||  
 gañ <sup>C</sup>phyir lus las sems byuñ bas || de phyir lus la rnam par <sup>D</sup>brtag | 12  
 gzugs stoñ tshor ba rañ bžin med || 'du śes med ciñ (<sup>P 147r1</sup>) 'du byed kyis<sup>179</sup> ||  
 dños po yod pa ma yin te || <sup>S</sup>rañ rig gsal <sup>N</sup>ba'i bdag ñid do || 13  
 de la śes dañ śes bya med || sems dañ sems (<sup>C 134r1</sup>)las byuñ ba med ||  
 'byuñ ba<sup>180</sup> med <sup>D</sup>de de yi phyir || rnam par mi rtog rañ <sup>P</sup>bžin no || 14  
 de ni sems min lus kyañ min<sup>181</sup> || khams rnam <sup>S</sup>ma yin chos kyañ min ||  
 gñis su med pa'i lam <sup>N</sup>mchog 'di || de ñid rig pa rnam kyis <sup>C</sup>gsuñ || 15  
 dmigs pa med pa'i chos 'di kun || <sup>D</sup>dmigs pa med las <sup>P</sup>rab tu grol ||  
 dmigs med blo yi dañ byas na || dmigs <sup>S</sup>pa med par 'gyur ba yin || 16

rNam par mi rtog pa'i rab tu byed pa slop dpon chen <sup>N</sup>po<sup>182</sup> Ā rya de ba'i<sup>183</sup> źal sña  
 nas mdzad pa <sup>C</sup>rdzogs so || ||<sup>184</sup> pa ñdi<sup>185</sup> ta chen po Mahā-(<sup>D 134r1</sup>)karuṇa<sup>186</sup> dañ | bod

<sup>173</sup> || P, N, C, S / | D

<sup>174</sup> bden P, N, S / brtan D, C

<sup>175</sup> gśam P, D, N, C / gśam S

<sup>176</sup> bžin D, C / bu P, N, S

<sup>177</sup> gzod D, C / bzod P, N, S

<sup>178</sup> || P, D, C / | N, S

<sup>179</sup> kyi D, C / kyis P, N, S

<sup>180</sup> ba D, C / po P, N, S

<sup>181</sup> min P, D, N, C / med S

<sup>182</sup> po P, D, C, S / pa N

<sup>183</sup> ba'i P, N, S / wa'i D, C

<sup>184</sup> || P, N, C, S / || D

<sup>185</sup> ñdi D, N, C, S / ñta P

<sup>186</sup> mahākaruṇa ego / ma hā kā ru ṇa P, D, N, C, S



『分別を離れること [に関する] 論書』という、アーリヤデーヴァがお作りになったものが収められる。

インド語で、*Nirvikalpaprakaraṇa*、チベット語で『分別を離れること [について] の論書』。師とブツダに礼拝します。

1. あれやこれの分別によってあれやこれのものが構想される。これらの構想作用はただ実体が存在しない。

2. 師であるナーガールジュナ御前の道から外れて歩むことになるだろう。よく明らかにすることの手だて(\**upāya*)がない、まさにその世俗的な真実から、

3. 心によって解放されるものごとが成立するのは、存在することがないそれらの心である。あるものから行為が生じた、という考え(\**vikalpa*)は一体何なのだろうか。

4. それらから離れた本性とは涅槃は異なるのであれば、存在することのない対象は、どんなものにおいても、考えの及ばない自我だ [ということになる]。

5. 誰でも喜びの本性(\**svabhāva*)によって心に幸せを生じるだろう。心で喜ぶ境地に達すること、それもまた構想作用にすぎない。

6. それ(喜びの本性) [と] 欲望(\**rāga*)を離れた自らの本性とのそれら<sup>189</sup>2つであるところのそれ [ら] は、[輪廻的] 生存の原因の最高である。

7. 存在は存在から生じない。存在は非存在からも [生じ] ない。存在は生じること [を] 常に欠いている。存在は欺く [性質をもった] もので空中の花と同様である。

8. 空間に似たあらゆるもの(\**dharma*)は、生じることが空間と類似したものである。条件が空間 [を作り出すのと] と同じ様に [ものを] 確立する。[輪廻的] 生存を生じる真理である。

9. 原因はなく結果はない。行為の本質(\**svabhāva*)があることはない。世間の人々は存在せず世間は存在しない。真実でないものとして生じるのが、これらあらゆるもの(\**dharma*)である。

---

<sup>187</sup> tsā C / tsa D / tstsha P, N, S

<sup>188</sup> || P, N, S / || D, C

<sup>189</sup> b 句の *dan* がうまく読めない。

10. 生じることがないので、どんなものが、どのように、他のものから [その存在性を] 知られようか。石女(子供の産めない女性)の息子のように、同様に知られえない。

11. 世間は最初から生じていたのではない。何によっても作り出されることはない。対象が存在せず、欺く [性質をもつ] この世間は、ガンダルヴァの都市(蜃気楼)のようである。

12. 分別からどんな世間が生じるのか。分別は心から生じたものである。身体から心は生じたものであるので、それゆえ、身体において分別される。

13. 色形(\*rūpa)は空であり、感受作用(\*vedanā)は実体(\*svabhāva)がなく、呼称(\*saṃjñā)は存在せず、生成作用(\*saṃskāra)によって、ものが存在することはない。自己を認識して明らかになる [のが] 自我である。

14. そこでは知ることと知られる対象は存在せず、心と心から生じたものは存在しない。生じるということがない。それゆえ、[ものは] 分別を離れた本性 [をもつ]。

15. それは心ではなく身体でもなく [認識の] 諸要素(\*dhātu)でもなく [世界を構成する] 要素(\*dharma)でもない。2つとして存在しないこの最高の道を、真実を知る方々はお説きになった。

16. 抛り所がないこれらあらゆるもの(\*dharma)は抛り所がないことから解放されている。抛り所のない知恵の清浄さが作られるのだから、[ものとは] 抛り所がないものとして生じるものである。

『分別を離れること [について] の論書』という、偉大な師であるアーリヤデーヴァ御前がお作りになったものを終わる。偉大な学者 Mahākaruṇa と、チベットの翻訳官 rMa ban chos 'bar によって翻訳された。

## 大乘破有論 (大正 1574)

龍樹菩薩造

西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法大師

賜紫臣施護奉詔譯

歸命一切佛諸有智者。應當如實了知諸法。此中云何。謂

- 1.一切性從無性生。亦非無性生。一切性若有生者。彼性是常。是性無實。猶如空華。
- 2.當知諸法與虛空等。彼諸法生亦與空等。一切緣法皆如虛空。彼無實故。當云何有。
- 3.諸法無因而復無果。亦無諸業自性可得。此中一切而無有實。無世間故無出世間。
- 4.一切無生亦無有性。云何諸法而有所生。世間親愛父子眷屬。雖有所生而無其實。
- 5.不從先世之所生故。亦非現世有其相故。此於世間無義可轉。猶如月中見諸影像。
- 6.世間無實從分別起。此分別故分別心生。由此心為因即有身生。是故有身行於世間。
- 7.蘊所成故名之為身。諸蘊皆空無有自性。蘊無自性而亦無心。以無心故是故無身。當知自性離諸分別。
- 8.若無其心亦無有法。若無其身亦無有界。此中所說是無二道。此所說者是真實說。
- 9.此中一切離諸所緣。此中所說離諸所緣。此中所作離諸所緣。此中所得離諸所緣。
- 10.所有布施持戒忍辱精進禪定智慧諸法如是常行。不久時中即能證得無上菩提。
- 11.以慧方便安住實際。起悲愍行廣度衆生。雖復如是有所得相。一切智性而不可說得。
- 12.彼一切法但有名字。一切但於有想中住。現前無實差別所生。差別生法而無所有。
- 13.彼一切法本無有名。但以假名而表了故。
- 14.當知諸法而無實體。一切皆從分別所生。此中若無分別者。即同虛空離諸分別。
- 15.如說眼者能見於色。作此說者是真實語。世間有諸邪執心者。執此所說如實而轉。
- 16.彼一切法聚類所現。當知此說是佛所說。是故應知。
- 17.此中義者眼不見色。乃至意不知法。若如是知是為智者。即能通達第一義諦。如是乃名最上真實。

我今依經。如是略說。

大乘破有論

京都大学大学院修了

*Ex-graduate Student,*

*Kyoto University*

*Okayama, Japan*